再会した母子
激しいセックスで
会えなかった日の穴埋め

俺は路肩に落ちていた空っぽのペットボトルを思い切り蹴飛ばした。
それも大勢の人が行き交う繁華街の道路のど真ん中で。
強い衝撃で凹んだペットボトルは、一瞬だけ宙に浮いて道路の反対端へ転がっていった。
嫌悪感に満ちた視線が自分に注がれる。
しかし俺は、どうにでも思えばいいと半ば自暴自棄になっていた。
警察の目にでも止まろうものならきっと職務質問は免れない。
しかし運が良かったのか、誰も突っかかってくる者はいなかった。

とにかく苛立っていた。
どこか満たされない荒んだ心の内はこの日に限ったことではないが、特にここ最近は情緒不安定な日々が続いていた。
そしてそんな自分の心情は、自らの不遇な経歴から来ていることを俺は自分で分かっていた。

〇学１年の時に両親が離婚。
父親に引き取られた俺は、そこから父親と二人きりでの生活が続いた。
しかし父親は飲んだくれのダメ人間。
いつも遅くまで街をほっつき歩いて帰ってくる。二人きりの生活になってからまともな会話をしたのは数えるほどだ。
様々な繊細で複雑な心情の変化がある学生時代に、俺には支えてくれるまともな家族というものがなかった。
〇校へは金銭的な面から進学することが出来ず、親父が勤めていた鉄工所でアルバイトとして働く日々が続いた。
街を歩けば楽しそうな学生たち。
そしてイチャつく新米社会人のカップル。
そんな幸せを横目に、俺は寂しいこれまでを過ごしてきたのだ。

そして現在俺は〇７歳。
少し前に、行きつけのカフェの店員のお姉さんに告白してあえなく振られる。
“自分の人生って何なんだ？”

そんな自問自答を繰り返すが明確な回答は得られず・・・。
ついに、半ば自暴自棄に陥ったと言うわけだ。
３日前にもうどうにでもなれと借金をして、手元には返す当てもないお金がある。
しかし俺はそのお金を未来のためではなく、この魅惑的な夜の街で全て使い切ってやろうと思っていた。
まだ俺には職場がある。しかし返せない借金をしてしまった以上、もう家には帰れない。俺は例えその日暮らしになっても、未来よりも今が大切だった。

募る悶々としたセックスへの渇望。
俺はファッションヘルスのピンク色の看板の前で立ち止まっていた。
如何にもその店に興味ありげな俺の様子に気づいたボーイの男性が、少し離れた場所から駆け足でやって来た。
「どうですか？ウチは今サービスタイムやってますので、凄くお得なんですよ！」
「はい・・・・じゃあお願いします」
あまり考えもせず、俺は一つ返事。
「はいっ、ありがとうございます！」
狭い入り口のそのすぐ先に階段があり、俺は男性に誘導されて二階へと上がった。
「１名さん来店でーーーす！！！」
大きな声で店内の従業員に向かって叫ぶボーイの男性。
俺はそのまま二階の待合室で待たされた。

狭くて生温かい待合室内。テレビ画面にはアダルト映像が流れていた。
壁にかけられていたのは価格表。
１時間３万円。
ここへ来てはじめて、それなりの高級な店だと分かった。
間を置かず、再びボーイの男性がやって来た。

“とにかく綺麗な人で・・・あと年上がいいです”

パネルなんてのもあるらしかったが、俺はとりあえずそうとだけ伝えて料金を前払いで支払う。
後はコンパニオンがやってくるのを待つだけとなった。
そして約１０分が経過。
「お客様お待たせしました。じゃあ３階で女の子が待ってますので、上階にお上がり下さい。ごゆっくりお楽しみください！！」
俺は高ぶる気持ちをなるべく押さえて、ゆっくりと落ち着いた素振りで階段を上がる。
一階から二階への階段とは違って三階へはらせん状の階段になっていた。
３階の通路への入り口に女性が待っていた。
この日俺のコンパニオンとなってくれる女性だ。

「ありがとうございます。こんにちは」
比較的落ち着いた大人の女性の声だ。
だけど俺は恥ずかしさもあってか、下向き加減であまり顔も見ずに答える。
「こんにちは・・・」
「あはははっ、ちょっと照れちゃってるのね。じゃあこっちについてきて下さい！」
手を引かれるまま、俺は部屋へと向かった。
たぶんすぐ脱げるようにだと思う、彼女はラフでそれでいてセクシーなワンピースを着ていた。前を歩く彼女の後ろ髪から漂う女性の香りがとても色っぽい。そして歩くたびプリンプリンと揺れるお尻。
それなりに年齢はいっているが、とっても色気のある大人の女性だとは分かっていた。
そして・・・・・。
俺の下半身はこれから始まる行為への多大なる期待によって凄い勢いでいきり立っていた。

約５年ぶりに再会したのは・・・・。

“母”

幼〇期、学〇期の俺を育ててくれた実の母とは言え、突然思いもよらない場所で、本当に予想の片隅にもない偶発的な場所で遭遇して、やはりさすがにすぐには気付けなかった。
しかし・・・・。
「け・・・け、健也（けんや）！？まさか・・・・あなた健也！？」
場所はファッションヘルス店の狭い個室。お互いに気付くのは時間の問題だった。
「か！？母さん！！ほ・・・・本当に母さんなの！？」

５年ぶりに再会した母親は、風俗嬢として働いていた。

俺は・・・・。

母の手を引いた！！

「母さん！！！」

階段を駆け下りて店を出た俺たちは夜の街を走る。
急転直下の状況下、一体何が起こっているのか、たぶん母もそして母の手を引いて走っている俺自身、リアルには分かっていなかったと思う。
とにかく俺の胸はいまだかつてないほどに大きく揺れ動いていた。
ざわめく騒がしい街の喧騒も、揺れながら夜空を照らすビルのネオンも、何も、何一つ目には入らない。耳にも入ってこない。
ひたすら、ひたすら俺は驚く母をよそに強く手を引いて走った。

そして、眠らない街中にあって平穏で静けさが漂う河川敷に到着した。

「はぁはぁは・・・・んくっ・・・んはぁはぁ」
肩で息をする俺と母。
「はぁはぁ・・・・ど、どうして健也！母さん・・・はぁはぁ・・・し、仕事中だったのよ！？」
「何が仕事だよ！！」

夜空に響き渡るような大きな声で俺は母に叫んだ。
たぶん俺のその叫びの８０パーセントは“怒り”。
「ずっと・・・ずっと俺がどんなつらい思いをしてきたか・・・んくっ」
あまりに感傷的になりすぎて、俺は言葉を詰まらせる。
そしてそれが全速力でここまで走ってきたことが理由でないことは、母にも確かに伝わっていたはずだ。
数キロ先まで行けば騒音によってかき消される川のせせらぎが、心地良く俺たちの耳に届いていた。

母と父の離婚は言わば両成敗。つまりどちらが悪いわけでもなかった。
そのことは父にも何となく聞かされていたし、実際、離婚間際に頻繁に起こっていた夫婦喧嘩の内容を聞いていても分かった。
しかし俺にとっての問題はそんなことじゃない・・・。
俺に“親を選ぶ意思”を与えてもらえなかったこと。
元々裕福ではなかったこともあり、息子の俺は自宅に置いておく必要があると言って父の独断で父が引き取ると決まった。
幼少の頃からろくに構ってもらった覚えもない父に引き取られた俺。もしかしたら働き手として必要だっただけかもしれない。母と連絡を取る方法も持たせてもらえなかった。
俺は・・・・。
俺は、母について行きたかった。
昔から本当に母さんっ子で甘えん坊だったんだ。
だから母に・・・・・。
不満や怒りの矛先を何処へ向けて良いのかも分からず、俺の心はそれ以来、空虚な家庭環境の中でどんどん荒んでいった。

抑えられない感情は少ししょっぱい滴となって俺の瞳から溢れ出る。
「んぐっ・・・・んくっ・・・・・」
そして母は、そんな俺を昔のように・・・・甘えてばかりだったあの頃のように、ぎゅっと抱きしめてくれたんだ。
柔らかくて落ちつける母さんの体の温もり。
「もう・・・もう母さん健也を手放したりしない。母さんもう何処へも行

かないから・・・」

優しく語りかけてくれる母の口調から、ほのかに後悔の念が感じ取れる。

“今からはもう遅いよ・・・”

母にその本心を伝える気力はなく・・・俺は心の中だけでそっとそう呟いた。

しかし。

一つだけ間に合うことがある。

今からだって十分すぎるほどに間に合うことがあるんだ！！

“それが何か分かる？？母さん”

そんな表情で俺は母さんを見つめた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「さっきの続き・・・・母さん」

「えっ？・・・・」

「だから、さっきの続き・・・しようよ、いいだろ母さん？」

「け、健也・・・・だ、だってっ・・・」

「俺に悪いって思ってるんだろ？」

「・・・・そ、それは・・・・・・・・」

「ならさ・・・・いいだろ、母さん。さっき俺がどういう目的であの店に行ったのか。そこで働いてる母さんが分からないはずない。当たり前だよね・・・」

「・・・・・・・・・・・」

ヒューーーーーーー。

やけに強い風が、何にも遮られることのない平たい川沿いの道を吹き抜ける。

「・・・・・・・・・・分かった。母さんがこの体で、母さんの等身大のこの体で、あなたの心の溝を埋めてあげるわ。健也が望むだけたっぷり・・・・」

母さんの腰に両手を回しギュッと抱きしめ返しながら、俺は斜め前方に見えるラブホテルのネオンを見つめていた。

「ンクチュッ・・・・ンムプチュ・・・ンクチュクチュプ・・・・」
俺はラブホテルの一室で母さんと性器を舐め合っていた。
ここが俺の生まれてきた穴。
そのことを確認するように。丹念にこれでもかというほどに淫乱に舐めている。
一心不乱に、ちょっと強引に。

―――体験版はここまでです―――
―もし気に入っていただけましたら商品をご購入ください―